

Changes in eating behaviors and physical and mental state of gastric cancer patients during the first 6 months after surgery

豊福, 佳代

<https://doi.org/10.15017/4060026>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名：豊福 佳代

論 文 名：Changes in eating behaviors and physical and mental state of gastric cancer patients
during the first 6 months after surgery

(胃切除後 6 か月間における胃癌患者の食行動および、身体的・精神的状態の変化)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

胃切除術を受けた胃癌患者の術後半年間における食行動，身体的状態およびうつ傾向の実態とそれらの関連を明らかにすることである．

【研究方法】

1. 研究デザイン, 対象者

本研究は自記式質問紙を用いた前向き縦断調査研究である．2014 年 8 月～2016 年 6 月に 3 つのがん拠点病院において胃切除術を受け，術後経過に重篤な問題なく研究協力に同意の得られた 74 名の胃癌患者を対象とした．胃癌ステージⅠ～Ⅲ，開腹・腹腔鏡手術，胃全摘・幽門側胃切除・噴門側胃切除を含め，内視鏡的切除術は除外した．術後重篤な合併症が出現した患者やアンケートに回答できない認知症や精神疾患患者は対象者から除外した．本研究は，九州大学（26-314）及び研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した．

2. 調査項目

1) 患者属性とがん関連情報

年齢，性別，身長，入院時体重，疾患に関する情報（手術日・術式・手術後の経過・術後病期診断，補助化学療法の有無），同居者の有無，および就労状況を取得した．

2) 食行動

食事回数および，食行動に関する質問 4 項目（時間をかけて食べられているか，満腹にならないよう量を調整しているか，空腹感の程度，術前の食事量との比較）について，4 件法で尋ねた．

3) 身体的状態

上部消化管癌術後機能障害尺度：DAUGS (Dysfunction After Upper Gastrointestinal Surgery) を用いた．32 項目 7 因子で構成され，下位尺度は逆流障害（4 項目），活動力障害（6 項目），食直後通過障害（7 項目），ダンピング様障害（7 項目），移送障害（4 項目），低血糖障害（2 項目），下痢障害（2 項目）である．5 段階尺度で，得点が高いほど機能障害が大きいことを示す．得点の範囲は 32-160 点である．

4) 精神的状態

抑うつ症状尺度：CES-D (The Center for Epidemiologic Studies Depression) の日本語版を用いた．全 20 項目で得点が高いほどうつ傾向にあることを示す．得点の範囲は 0-60 点であり 16 点以上でうつ傾向とされている．退院前の抑うつ症状について 16 点未満の低抑うつ群 ($n = 50$) と 16 点以上の高抑うつ群 ($n = 14$) の 2 群に分けて分析に使用した．

3. 調査手順

食行動、術後機能障害（DAUGS）、抑うつ（CES-D）に関する質問紙調査を、術後5回（退院前、術後2週間、6週間、3か月、6か月）縦断的に実施した。

4. 分析方法

すべての基本統計量を算出した。変数の経時的変化は反復測定分散分析、患者要因（属性・がん関連情報・抑うつレベル）と術後機能障害の関連は二元配置分散分析を用いて検討した。多重比較に Bonferroni を用いた。食行動および抑うつと術後機能障害の関連は、相関係数を求めた。分析には IBM® SPSS® Statistics ver.23.0 を用い、すべての有意水準を 5%未満とした。

【結果】

5回すべての調査に回答した64名の胃切除術後患者を対象とした。平均年齢 66.5 ± 10.3 歳、男性が 63%であった。胃全摘 15名（23%）、胃亜全摘 49名（77%）で、胃がんステージ I が 53名（83%）であった。体重は6ヶ月で約 10%減少した（ $p < .001$ ）。食行動を実践している人は2週間後の8割から術後6ヶ月には全体の半数に減少したが、食事摂取量は術前の8割程度に回復した。

術後機能障害（DAUGS）は術後2週間が最も強く（ 55.1 ± 13.1 ）、6ヶ月（ 50.3 ± 11.9 ）で有意に改善した（ $p < .05$ ）。下位尺度の「活動力障害」「食直後通過障害」も同様に2週間が最も強く、その後6ヶ月に軽快した（ $p = .001, .007$ ）。「逆流障害」は退院前と比べ3ヶ月に悪化した（ $p < .01$ ）。DAUGS と食行動の実践には有意な関連は認められなかった。

対象者全体の抑うつ状態（CES-D）は2週間 12.5 ± 8.9 で最高値となり6ヶ月で 9.9 ± 6.1 となったが有意な変化ではなかった。退院前、高抑うつ群は 24.4 ± 6.3 と高い抑うつ傾向を示したが、6ヶ月では 11.1 ± 6.1 と有意に低下した（ $p < .001$ ）。低抑うつ群は半年間抑うつ状態に有意な変化はなかった。

抑うつと術後機能障害の関連を CES-D と DAUGS の相関関係で検討した。すべての調査時点で有意な正の相関があり（ $r = 0.312 - 0.515$ ）、2週間でやや強い相関があった。

DAUGS 総得点の経時的変化と患者要因との関連を二元配置分散分析で検討した。胃がんステージ以外では交互作用はなく、時間の主効果が有意だったのは年齢・性別・就労・術式・抑うつの程度であった。年齢が低い、男性、就労あり、胃全摘群の術後機能障害が強かった。要因では就労群と高抑うつ群が有意に他方の群よりも機能障害が高い状態で経過した。

【結論】

患者は、胃切除後6ヶ月間で様々な身体的・精神的変化があった。胃切除術後機能障害は術後2週間に一旦悪化し、6ヶ月で軽快した。術後機能障害と抑うつ傾向とは関連があり、入院中うつ傾向の高い人はうつ傾向の低い人と比較すると、6ヶ月間継続して術後機能障害が強い状態で経過した。そのため、入院中の精神状態を把握し、術後早い段階から身体面だけでなく精神面も継続的にサポートする必要性が示唆された。

本研究は対象者が少数なうえに、術式や化学療法の有無など条件の異なる対象で行い、分析結果に限界があった。さらなる追加調査・追跡調査によってより詳細に臨床背景を把握し、患者支援に繋げる必要がある。